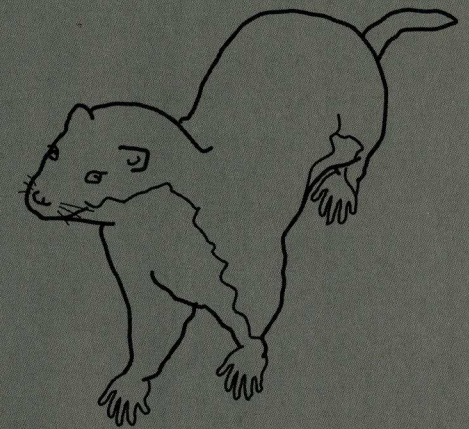


生きもの 博物誌

【オコジヨ】
ユーラシア大陸、アメリカ、日本



権力の象徴だったが ゆえの受難

佐々木 史郎
(ささき しろう)

本館研究戦略センター

乱獲の歴史

見た目がかわいらしく、またその動作も愛らしいオコジヨは、日本でもしばしば昔話に登場し、また漫画やアニメの主人公にもされたことがある。仲間のイタチなどと比べると全体に小型で、吻(鼻)から口にかけての部分)が短く、かわいい顔をしているが、結構気性が荒く、勇猛果敢で、自分より大きいウサギやトリもおそって食べてしまう。

しかしこのオコジヨには人間による乱獲の歴史が影を落としている。現在世界各地で軽度懸念の希少種とされており、日本では準絶滅危惧種とされている。夏は背中が茶色でお腹が白い夏毛で覆われているが、冬になると全身真っ白な美しい冬毛に変わる。

しかも、尾の先端だけが黒く、それが毛皮全体の美しさを引き立てる。このオコジヨの冬毛が、ヨーロッパや中国の王侯貴族の美意識をくすぐってしまったのである。

国王や貴族に愛される

例えば、フランススルイー四世(太陽王)の肖像画のひとつ(リゴール作、ルーブル美術館蔵)は、羽織ったロープの裏地をこれ見よがしに翻した姿で描かれている。そこには白地に黒い点が規則正しく並んでおり、裏地がすべてオコジヨの毛皮であることがわかる。黒い点はもちろん冬毛のオコジヨの尾の先端部分である。

オコジヨ毛皮のロープをまとったのはルイー四世だけではない。フランス王ではルイー三世から一六世まで、オコジヨのロープを身につけた姿で描かれた肖像画があり、アングルやダヴィッドが描く皇帝ナポレオンの肖像もオコジヨのロープをまとっている。フランス王以外でも、イギリス、プロイセン、バイエルン、スペインなどの国王や貴族の肖像画にもオコジヨのロープが描かれている。冬毛のオコジヨの白さは純粋さや純潔をあらわしているといひ(ダ・ヴィンチの「白貂を抱く貴婦人」など)、多くの王侯たちに愛されたのもそのためだろうが、そのロープは事実上王権あるいは権力の象徴である。

その王侯たちの嗜好を満足させるために、オコジヨの受難はヨーロッパからシベリアへと拡大した。一六世紀にロシアがシベリア征服を始めると、オコジヨの供給地もユーラシア大陸の東へと広がったのである。ロシアのシベリア征服の原動力として「柔らかい金」とよばれたクロテンの毛皮が注目されているが、じつはオコジヨの需要もかなり高かったのではないかと思われる。クロテンはシベリアでも森林が密な地域に多いが、オコジヨは森林ツンドラ地帯のような寒冷な疎林地域にも多い。そのために、東シベリア北部では主要な毛皮がクロテンではなくオコジヨだった。この地域のオコジヨは体格が大きく、毛並みも美しく、尾の黒い部分が際だつた。零下五〇度以下にも達する酷寒の北シベリアで、エヴェンキやエヴェンといったこの地域の先住民の祖先たちはせつせつこのオコジヨを捕っていたのである。ルイー四世がまとっていたロープにも、シベリアで捕らえられたオコジヨが入っていた可能性がなくもない。



ルイ14世の肖像画(リゴール作、ルーブル美術館蔵)。ロープの裏地にふんだんにオコジヨの冬毛の毛皮が使われている



輪翼にかかったオコジヨ
(ロシア連邦サハ共和国エヴェノピタンタイ地方にて)



ソクソウで捕らえたオコジヨ



オコジヨの皮を剥いだ後、それを引き延ばして乾燥させる
(ロシア連邦サハ共和国エヴェノピタンタイ地方にて)



保存されているオコジヨの毛皮、右側のボールペンの長さ(20センチメートルほど)と比べてもその大きいことがわかる

オコジヨ (学名: *Mustela erminea*)

ユーラシア大陸北部から北アメリカ大陸北部の森林地帯、疎林地帯に生息する食肉目イタチ科イタチ属の動物。日本にもホンドオコジヨ(M.e.nippon)とエゾオコジヨ(M.e.orientalis)の2種類の亜種が生息する。日本のオコジヨは胴長が10数センチメートルから20数センチメートルと小型だが、シベリアのオコジヨは30センチメートルをこえるなどかなり大型である。夏は背中が茶色で腹が白い毛で覆われているが、冬になると全身真っ白な長い毛で覆われ、尾の先端にだけ黒い毛が残る。餌は、ネズミ、小鳥、昆虫などが中心だが、自分より大きいノウサギやライチョウなどをおそって食べることもある。

